

# 高等学校社会科における探究型教科学習の授業モデル構築

八王子学園八王子高等学校

渡邊大介

他 3 名

## はじめに

「探究学習は難しい」という教員の声は多い。この難しさの正体は何であろうか。難しさとして、授業時間や教員数の不足、学習環境の不備が指摘されることは多い。確かに、十分な授業時間や教員数、学習環境が整わなければ、効果的な探究学習を実施することは難しい。しかし、それらの外在的な条件が整っても、探究学習の難しさは残るように思われる。いくら教員が探究的な授業を実践しようとしても生徒がついてこない（ついてこれない）ことは想像に難くない。学習環境は整っているはずなのに、生徒の探究活動が上手くいかない。多くの教員や学校が直面する難問である。恥をしのげば、本校もこの難問にぶつかっている最中である。教員だけでなく、生徒にとっても「探究学習は難しい」のである。探究学習には生徒の“つまずき”という内在的な難しさが確かに存在している。しかし、この生徒に内在する難しさが十分に明らかにされているとは言い難い。以上の問題意識に立ち、探究学習の孕む諸種の難しさを明らかにし、社会科の内容に特化した探究学習の一授業モデルを提案することが本研究の目的である。

変化の激しい現代社会において、自ら課題を発見し課題を解決する探究学習が求められている。しかし、その難しさから探究学習に二の足を踏む学校は少なくない。本研究が探究学習の孕む困難性を幾らか解きほぐし、探究学習を実践しようとする先生方の糧となれば幸いである。なお、本研究は 2023 年度（令和 5 年度）より継続されたものである。

## 1. 先行実践の整理

管見の限りでは、探究学習に関する先行実践の十分な整理がされているとはいえず、探究学習に関するこれまでの成果と課題が明確になっていない。まずは、探究学習に関する先行実践を整理し、これまでの成果と課題を明らかにしたい。

### （1）2023 年度の成果と課題

2023 年度は、探究学習に類する比較的新しい実践を整理した。本校の「社会探究」は社会科の内容に特化（限定）し、個人で設定したテーマを探究するものである。そのため、教科の枠組みや学習方法による整理となっている<sup>1</sup>。

①京都市立堀川高校の「『探究』の時間」は、「総合的な探究の時間」における探究型

---

<sup>1</sup> 整理の詳細については、令和 5 年度の報告書「高等学校社会科における探究型教科学習の授業モデル構築」を参照されたい。

授業の一モデルを示しているといえる。一方で、社会科の教科内容に特化した探究学習は、②大津和子の「一本のバナナから」や③大阪府立西成高校の「反貧困学習」が代表的なものとなされ、どちらも教科内容に深く切り込む優れた実践である。しかし、それらの探究学習はクラス単位で行われるものであり、生徒一人ひとりが課題設定をするものではない。生徒一人ひとりが課題設定をする教科型探究学習としては、④公民科「公共」大項目C「持続可能な社会づくりの主体となる私たち」における授業に可能性があるが、②や③に比べると行動や実践に重きが置かれ、教科の内容に深く追究するものとならない可能性がある。また、これら検討した②大津和子の「一本のバナナから」や③大阪府立西成高等学校「反貧困学習」では詳細な授業記録が残されているが、①京都市立堀川高校の『探究』の時間、④「公共」の実践においては十分な実践記録が蓄積されているとはいえない。

比較的最近の探究学習を概観した限りでは、社会科など一教科に特化した探究学習の実践は多くない。そして、社会科の内容に特化した探究学習はあるものの、学級単位で展開されるものであり、生徒一人ひとりがそれぞれのテーマを設定して探究学習を行う実践は乏しいと言わざるを得ない。そして、どの実践についても検証が十分であるとはいえない。この課題を受けて、八王子高校「社会探究」では、社会科という教科に特化し、生徒一人ひとりがそれぞれのテーマを設定する探究学習を実践する。そして、事後的な検討にも挑みたい。

## (2) 問題解決学習への位置づけ

なにも探究学習は最近実践され始めたものではない。1947年の学習指導要領において「社会」科が誕生し、問題解決的な学習が主たる学習方法として実践および研究されている。問題解決学習は、子どもが直面する問題を解決することを通じて、様々な知識や技能などを習得することを目指す学習方法であり、無着成恭「山びこ学校」、樋浦辰治「用心溜」、吉田定俊「水害と市政」などが代表的な実践としてあげられる。

昨今のエージェンシー教育や探究学習、シティズンシップ教育などはこの問題解決学習を系譜とし発展したものといえる。しかし、これらの実践において問題解決学習の肝要が継承されていると言い切れるだろうか。問題解決学習が発展するに従って、「問題」は子どもから離れ、教科で教えるべき内容となり、問題を考えるよりも「解決」することに重点が置かれているきらいがある。これについては唐木も「社会科における問題解決的な学習の『問い』が、児童生徒にとって自分事になっていないことである。…(中略)…問題解決的な学習の基本は『子ども一人ひとり』ということである。『どのように学ぶか』に目を向け、学習過程を強調することばかりではない。優先されるべきは前者(『子ども一人ひとり』)であって、後者(『学習過程』)はそれを支援する推進役として役立てられるべきである」(唐木 2023)と指摘している。初期の問題解決学習においては、子どもの問題が学習の出発点となっており、その後も子どもと社会の問題を結節させようと苦心す

る実践者の姿勢がみてとれる<sup>2</sup>。しかし近年の探究的な実践では、社会の問題を子どもたちが肌で感じ取りづらくなっていることを理由に、子どもにとっての切実性がおざなりにされているように思われる。確かに、子どもにとって切実な問題と社会の問題を結節することは難しい。しかし、だからといってその結節を無理だと諦めては社会科にならない。この両者の結節は、探究学習のみならず現在の社会科教育が抱える課題でもある。

問題解決学習を振り返ることによって、昨今の探究的な学習の課題が照らされたように思う。八王子高校「社会探究」は明らかになった課題を受けて、生徒にとって切実な問題を社会の問題として探究させるものとした<sup>3</sup>。

## 2. 2024年度 八王子高校「社会探究」実践記録

八王子高校「社会探究」では大学のゼミナールを模して、教科の内容を深く探究する個人型の探究学習を試みる。そして、詳細な授業記録を残して検証を行う。これらは、これまでの探究学習において十分でなかった点である。

### □授業の概要

「社会探究（1単位）」※学校設定科目

- ・日時：2024年度4月～3月
- ・対象：八王子学園八王子高等学校 第2学年 総合コース（リベラルアーツ系）86名
- ・授業内容：社会科の内容を深く掘り下げる探究活動
- ・授業方法：社会科教員3名によるゼミナール形式による探究型学習<sup>4</sup>
  - 長谷川（法学/歴史学ゼミ）29名
  - 波平（社会学/経済学ゼミ）29名
  - 金井（地理学/都市学ゼミ）28名
- ・評価方法：ルーブリック評価（評価材料は論文と発表）※ルーブリックは後掲
- ・第1学年「社会総合」との接続

本実践は、高校第1学年の授業「社会総合」（学校設定科目）と緩やかに連続するものである。「社会総合」は、SDGsをテーマにした講義および探究学習であり、「社会探究」同様に3名の社会科教員によって実践される。授業はSDGsに関する全体講義から始まり、その後は生徒の選んだSDGsのテーマに合わせて3グループに分けたゼミナール形式での授業が展開され、各学期に1本の計3本のレポート作成を行っている。なお、レポートの分量は、1学期800字、2学期800字、3学期1200字と設定している。この

---

<sup>2</sup> 有田和正と長岡文雄による「切実性論争」を参照されたい。

<sup>3</sup> （1）大阪府立西成高校の「反貧困学習」における「問題」は、子どもにとって切実な問題と社会の問題が結節された実践であるといえるだろう。

<sup>4</sup> 2024年度については、探究する分野によってゼミを分けたものの、生徒のテーマは多様なものとなった。また、授業変更等の都合により、ゼミによって授業時数に若干の差が生じている。

「社会総合」を通して、論文のテーマ設定や文献調査、論文執筆等に関する基本的事項は学習することができる構成となっている。

・2023年度「社会探究」との違い

2023年度「社会探究」は2単位であったが、カリキュラム上の都合から2024年度では1単位へ減単された。また、総合コース（リベラルアーツ系）の生徒が増えたことに伴い、履修者が43名から86名へと倍増した。このため、教員一人あたりの生徒数は約15名から約30名へ倍増したことに加え、授業時数が半減した。

(1) 法学/歴史学ゼミ（長谷川）

①授業展開

(時)	授業内容	特記事項
1	(1) オリエンテーション ・教員の自己紹介 教員の専攻や社会に対する問題意識などについてプレゼンテーション形式で説明 (2) 生徒各自の関心動向についてのアンケート調査 アンケート結果を踏まえて、各教員の担当生徒を決定して生徒に通知	
2	(3) 問題意識形成 ・フジテレビ「ビギナー」第8話を視聴 「貧困と犯罪」について「(犯罪という)結果への対処」と「社会的予防策」について考えさせる ・視聴感想レポートを提出させる	
3	(3) 問題意識形成 ・視聴感想レポートのフィードバック PowerPointを使って、上記の2観点についての生徒たちのアンケート結果を報告 (4) 論文作成－①手順について講義 ・論文概要書の基本フォーマットを配付 当該フォーマットは序論・本論・結論という論文の基本形式に沿って作成されているので、これに沿って論文の概要を考えるように指導	
4-8	(4) 論文作成－②論文概要書の作成準備 ・論文概要書の作成について個別に指導 1人概ね1～2分の指導で、進捗状況を確認するとともに今後の課題に気づかせる	
夏季休業	・論文概要書の作成を課題とする	
9-10	(4) 論文作成－③論文概要書の修正 ・論文概要書の添削指導 提出された概要書を添削して、論文の骨子を確認	
11-16	(4) 論文作成－④論文の執筆 ・参考文献の読解方法を個別に指導 特に文献の一部しか読解できていない生徒へ論文全体としての趣旨をつかむように指導 ・作成途中の論文内容について個別に指導 論文の基本形式に沿っているか、参考文献の考察を踏ま	

	えて適切な私見を醸成しているかを確認	
17	(5) プレゼンテーション①準備について講義 ・資料の作成方法について講義 昨年度の事例を紹介しながら，Google スライドや PowerPoint を活用しての発表方法について指導	
冬季休業	・プレゼンテーションの準備を課題とする	
18-22	(5) プレゼンテーション②発表 ・1人3～5分でプレゼンテーションを実施 準備したGoogle スライド等を使いながら，執筆した論文の内容を発表 ・視聴した生徒にはアンケートへの回答を課す アンケート結果は後日，発表者へフィードバック	
23	(5) プレゼンテーション②発表 ・発表内容とアンケート結果の振り返り 自身の発表とそれに対するアンケート結果をもとに，論文の内容について再考する機会を設ける	

## ②生徒のテーマ

生徒	論文タイトル
A	500年後に日本人全員の名字が「佐藤」になるのは本当なのか
B	音楽がもたらす体への影響
C	日本の現代社会におけるルッキズムが与える影響
D	のび太の生き方について
E	人工知能は私たちの仕事を奪っていくのか
F	100m 走の世界記録はどこまで伸びるか
G	ドーピングについて
H	日本サッカーが今後さらに向上していく為には
I	筋肉が人間にどんな影響をもたらすのか
J	結婚の時代性
K	日本と韓国のテレビドラマから見える文化の違い
L	もし「どこでもドア」が現実存在したら現代社会にどのような影響を与えるのか
M	「ディズニー化」された映画は，パロディ・オマージュ・二次創作のどれなのか
N	ちいかわの人気
O	犬に心はあるのか
P	サブスクリプションで音楽を聴くことが主流となる中，CD を購入する目的は何か
Q	やる気を起こすために
R	運命の人について
S	筋肉痛による筋肉の増加量の変化
T	時代と共に「長さ」を変える楽曲
U	音楽ゲームがもたらす認知機能の向上について
V	日本が第二次世界大戦に勝っていたらどうなっていたのか
W	アートを見極めるには
X	スポーツが社会に与える影響
Y	薬剤師の将来
Z	マルチ商法と人間関係の崩壊
AA	銀行のこれからについて

AB	これからの日本の教育の理想
AC	音楽とメンタルの関係

### ③ゼミナール形式による「探究」型授業の成果と課題

昨年度の研究にて、ゼミナール形式による「探究」型授業の効果については自覚できたので、本年度は昨年度の形式を踏襲しながら、授業内容の再構成によって課題となった諸点の解決を図るべく授業実践に臨んだ。しかし、本年度の授業実践は、2単位から1単位への減単と、1人の教員が担任する生徒数が約2倍（約15人から約30人）になったことの強い影響を受けて、期待していたような授業を展開することは厳しかった。

まず、本年度の論文テーマであるが、少なからぬ生徒が社会的な課題を意識せず、ただ自己の興味や関心にしがたってテーマを設定してしまった。また、論文の内容も、参考文献の読解が誤っていたり独善的であったりするものが多く見られた。これらの問題点は、当然にプレゼンテーションの質にも影響を及ぼした。

これらの課題が生じた要因を2つ挙げたい。1つは、授業内容(4)②において「自己と社会のつながり」に意識を向けてテーマを設定させる指導が不足したことである。昨年度はここで2～3時間を費やすことができたが、夏季休業期間に論文概要書を作成させるという時間的制約を意識するあまり、指導が行き届かなかった。もう1つは、個別指導の不足である。1人の教員が、1単位という限られた時間で約30人の生徒のテーマ設定を個別に指導しようとする、授業時に1人の生徒に対して2～3分しか個別に指導を行うことができず、指摘のみで終わってしまうことも多々あった。また、前回の授業での指摘を学びに適切に反映させられているかを確認することも難しかった。

本年度の授業実践を通して痛感したのは、ゼミナール形式による「探究」型授業には相当な時間と人力（教員数）が不可欠であるという当たり前の事実であった。しかし、「ないものねだり」をしても生産的ではないので、所与の条件でより効果的な授業を行えたかもしれない方法を考察してみた。それは、生徒たちにチームを結成させて、チームとしてテーマ設定、論文執筆、発表を行わせる方法である。この方法の利点として、①テーマ設定において特定の個人の興味や関心に依拠することが防げる、②教員は個々人ではなくチームを指導することになるから、結果として1つのテーマ（ひいては当該チームの生徒たち）により多くの時間を充てられる、③チームでの活動を通して、生徒どうしのインタラクティブな学びを促進することができる、の3点が挙げられるであろう。

ゼミナール形式による「探究」型授業の効果そのものは昨年度の授業実践で実感できたので、本年度の授業実践とその反省をもとに、教育現場での限られた条件下でどのような授業を展開できるかを模索していきたい。

## (2) 社会学/経済学ゼミ（波平）

①授業展開

(時)	授業内容	特記事項
1	【共通】 (0) オリエンテーション (各教員の自己紹介など) 生徒各自の関心动向についてのアンケート調査	
2	【共通】 (1) 問題意識形成 ・フジテレビ「ビギナー」第8話を視聴	
3・4	(2) 問題意識形成 ・NHKスペシャル「新・映像の世紀」第6集を視聴	
5・6	(3) 論文のテーマ設定 ・文献収集 ・研究計画書作成への講義	
夏休み	(4) 研究計画書の作成と提出 ・収集した文献の読み込み	
7	(5) 論文作成 ①論文の書き方の講義	
8～14	(5) 論文作成 ②個人面談 ③論文完成	
15	(6) プレゼンテーション ①プレゼンについての講義	
冬休み	(6) プレゼンテーション ②資料作成と発表練習	
16～20 (予定)	(6) プレゼンテーション ③発表	
21	(7) 研究紀要作成	

②生徒のテーマ

生徒	論文タイトル
A	「海ガメの現状・改善」
B	「各国のメンタルケア, 自己肯定感向上の取り組み」
C	「エンターテインメントにおける世界と日本ーミュージカルとアニメによる」
D	「ブラック部活をホワイト部活に変えるために」
E	「日本に安楽死制度がない理由」
F	「なぜ日本人の睡眠時間は短いのか。」
G	「世界のEV化について」
H	「睡眠時間～スポーツ編～」
I	「日本で殺処分ゼロを実現するのは不可能なのか」
J	「生徒と先生のための教育心理学」
K	「進化し続ける救命医療 ～これからどのように進化していくのか～」
L	「サンゴ礁の現状について」
M	「中生代の生き物が小型化した理由」
N	「無意識の加害者」
O	「気象病に対する国の取り組み」
P	「高齢者と子供に対する税金の使われ方について」
Q	「アイヌの権利について」
R	「乳酸が発生する仕組みとその対処法」
S	「ダ・ヴィンチの白貂を抱く婦人が美術に与えた影響」
T	「日本の鉄道貨物輸送」
U	「人間の生きる意味」
V	「台湾有事と日本」
W	「宇宙開発について」

X	「ホモ・サピエンスの歴史と特性」
Y	「メンタルが引き起こすアスリートのパフォーマンス」
Z	「なぜ日本人は政治に関心がないのか」
AA	「e スポーツの現状と発展」
AB	「なぜ年々熱中症患者は増え続けているのか」
AC	「薬害に対する世界、日本の対策」

### ③ゼミナール形式による「探究」型授業の成果と課題

ゼミの分野の都合上、日常生活や社会に目を向けるために、まずは「NHK スペシャル 新・映像の世紀 第6集 あなたのワンカットが世界を変える 21世紀の潮流」を視聴してどのような時代を生きているのかを考える機会を提供した。しかし、自らの課題の設定の一助になればと思ったが、「同時多発テロ」など歴史教育のなかでしっかりとまだ理解ができていない事案の方に関心が移ってしまった生徒もいたので、この点は次に反省して生かしたいアプローチではあった。

その後は、自らの論文テーマの設定を実施したが、今回このゼミに集まったメンバーは、スポーツ系のクラブで主軸となっている生徒が多かった。部活動という自分自身の領域といえるものがあり、それを軸とした課題設定をもっていた。自分で問いを立てるということに関しては、多くの生徒が合格点という結果であったと言えよう。

しかし、論文のテーマ設定の後、授業内で研究計画書の指導ができなかったことは、その後の論文作成に大きな影響があった。論文の骨組みをしっかりとさせるために、研究計画書では「背景」「目的」「方法」「結果」「考察」を書かせたが、それ以前としての書籍や学術論文と向き合うということをはとんどしたことがない生徒が多数を占めており、実際に論文を書き始めて上記の何かしらが崩れ、壁に当たり、執筆が止まるケースも時には生じた。今年度より1単位で本授業は展開をしているが、1単位という中で、テーマ設定→論文執筆→プレゼンテーションのプロセスはやや詰込み過ぎたのではないかと痛感している。

また、時間という点での課題とともに質という点でも課題はあった。今回は1人の教員に対して約30名という生徒数であった。昨年度と比較して倍以上の生徒を受けもつということで、個別の進捗状況を細かく把握し、フィードバックを行なうことが困難であった。それゆえに、もう少し早い段階でこちらからアドバイスができていれば、さらに論理性がある論文が執筆できたのではという生徒が多かったとも感じている。

以上のことから、本来は1つのテーマや課題に対して深く掘り下げ、その本質や原理を理解しようとするプロセスを大事にする「探究」型の授業というには課題が多いものとなった。理想的な目標設定において、現実的な制約を十分に考慮しなかったことが要因の1つにあると思われるが、単位的な問題や授業に関わる教員数といったリソースの面をより豊かにすることができれば、効果的な取り組みに「探究」型授業になるという可能性も感じた。



### (3) 地理学/都市学ゼミ (金井)

#### ①授業展開

(時)	授業内容	特記事項
1	(0)【全体】イントロダクション(ゼミの説明)	
2	(0)【全体】法学について(ビデオの視聴)	
3	(1)地理学について 地理学的な物事の見方	
4	(2)小論文の書き方について 論文構成, 小論文の文章のまとめ方について	
5	(2)文献調査について 書籍の活用・インターネットの活用	
6-7	(2)文献調査	図書館利用
8	(2)小論文の骨子について 論文概要書の書き方について	
夏休み	論文概要書の作成	
9	(2)小論文の執筆について	
10	(2)小論文執筆(二者面談)	
11~17	(2)小論文執筆(二者面談)	
18	(2)小論文提出	
19	(3)小論文のプレゼンについて【予定】	
20~23	(3)小論文のプレゼン【予定】	

#### ②生徒のテーマ

生徒	論文タイトル
A	陸上競技の短距離におけるアフリカ系選手の速さ
B	感染症と人類の歴史
C	スポーツにおけるメンタル
D	出生地とスポーツの有利不利
E	相手を読み取る心理学
F	同性婚が認められた国のメリット, 日本の今の状況
G	ケープペンギンの絶滅危機
H	幼稚園教諭における人手不足問題
I	抹茶と緑茶の違い
J	日本の英語教育
K	脱炭素の効果と諸問題
L	東京地方における地域格差とその解決策
M	スポーツツーリズムについて
N	オーバーツーリズムについて
O	音楽が人に与える影響とは
P	ヴィーガンとヴィーガンじゃない人の生き方
Q	ラーメンと地理学
R	環境による人の性格や価値観の変化
S	現代の子供のスポーツ離れ
T	首都圏の鉄道の遅延について
U	深海生物が水圧に耐えられる理由
V	人間の夢と動物の夢の違い
W	歌い方について

X	地震から命を守る
Y	男女の恋愛面における考え方の差異
Z	VR技術における今後と発展
AA	お金持ちは幸せなのか
AB	看護師への道

### ③ゼミナール形式による「探究」型授業の成果と課題

昨年度に引き続き「社会探究」の地理/都市学のゼミとしての指導を行った。地理学的ものの見方として、空間を中心に視座を置き、物事を深めていくことを理解させるために、柳田國男の「蝸牛考」を用いながら、方言と地域の空間的な広がりを感じさせ、地理的な思考を深めさせた。結果として、地理的な視座を持ちながらツーリズムについて、ご当地ラーメン等の空間に根ざしたテーマの小論文を執筆した生徒もいた。ただ、昨年引き続き、多くの生徒が自分の興味があるスポーツやなりたい職業の調べに小論文のテーマがとどまってしまった。また、自然科学に興味を持っている生徒が生物を探究する事例もいくつか見られた。社会科の授業として探究学習を行っているため、社会科にテーマを寄せるべきなのか、生徒の興味を尊重させるべきなのか、担当教員として頭を悩ませる部分であった。

小論文を執筆するにあたり、文章生成AIを用いた生徒が見受けられた。論文を自らの手で執筆しないのは、自身の能力が身につかないだけでなく、AIの性質上、インターネット上の情報をつなぎ合わせて文章を出力しているため、剽窃である。ネットリテラシーを含めた文献引用の仕方を生徒が熟知できるように講義内で伝えてゆく必要があると感じた。

### 小括

「社会探究」では、3つのゼミナールに共通して1200～1600字程度の論文の完成とプレゼンテーションを探究活動の到達点とし構成されている。そのために授業は、問題意識の形成、論文作成、プレゼンテーションの大きく三部に分けられている。

2024年度は、授業数が2単位から1単位に減じられたことに加え、教員一人当たりの生徒数が約15名から約30名へと倍増したことの影響が大きかったように思われる。授業時数が減少し、生徒数が増加したため、生徒一人ひとりにきめ細かな指導を展開することが困難となった。これはかねてから指摘される探究学習における外在的課題であるが、やはり教員一人当たりの人数は20人以下が望ましいという結果となった。また、授業時数については、大学のゼミナールを模して論文の執筆と発表をするならば、少なくとも2単位が望ましいように思われた。

以下に、2年に亘る実践研究で得られた知見を基にした「探究型教科学習の授業モデル」を提示する。また、実際に評価で使用したルーブリックを掲載する。なお、下記ルー

ブリックは3つのゼミで共通して使用したものである。

探究型教科学習（社会）の一授業モデル（八王子高校「社会探究」）

	授業内容および授業方法	留意点
第1次 (1学期中間)	<p style="text-align: center;"><span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">問題意識の形成</span></p> <p>(1) オリエンテーション&amp;アンケート</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人数の偏りを防ぎたい場合、法学、経済学、地理学などの抽象的分野については敷居を低くする必要がある。</li> </ul>
	<p>(2) 講義形式による授業</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>関連する新聞記事や雑誌を並べて、好きに読ませる活動も良い。</li> <li>「高校生ビジネスグランプリ」など高校生向けの各種コンテストの題材を利用するのも良い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>TV番組など映像資料や写真の多い雑誌は生徒の関心を喚起しやすい。学校図書館司書に依頼すると資料を集めやすい。</li> </ul>
第2次 (1学期期末～2学期中間期末)	<p style="text-align: center;"><span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">論文の執筆</span></p> <p>(1) 論文作成手順について講義</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>手順書を配付すると効率的である。</li> </ul>
	<p>(2) 参考文献の調査</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>興味を持った事柄について、学校図書室や近隣図書館の蔵書を読む。</li> <li>徐々にテーマが固まるので、新聞記事やインターネット記事などで更に情報を集める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>面白かった本をリストアップさせる、目を通した本に対するコメントや感想を書かせるが良い。</li> <li>専門書の読解は難しく、新書レベルが適当であると思われる。</li> </ul>
	<p>(3) 論文概要書の作成</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>仮タイトル、プロット、問題意識、参考文献を含んだ論文概要書を作成する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒にとって身近なテーマを設定させたい。</li> <li>教員による個別面談が効果的である。</li> <li>仮説の設定は不要であることも多い。</li> </ul>
	<p>(4) 論文の執筆</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1200字程度の論文を執筆する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>手書きによる下書きが出来上がった後にPCを用いて執筆すると効率的であった。</li> <li>社会の問題を個人の努力に帰すことのしないようにした</li> </ul>

		い。
	(5) 論文の推敲 ・適宜，教員による助言を行う。	・教員による個別面談が効果的である。
第3次 (3学期)	プレゼンテーション	
	(1) パワーポイント作成 ・5分程度の発表スライドを作成する	・スライドの作成に慣れている生徒は多い。
	(2) ゼミ内発表 ・1人5分程度の発表を行う	・発表後，全体発表に向けたリフレクションを行うと良い。
	(3) クラス内発表 ・1人5分程度の発表を行う	・授業時数に余裕があれば，発表後に論文を修正するのも良い。

上記が1年間を通じた探究型教科学習（社会科）の一授業モデルである。本授業案では，社会科の範疇において生徒一人ひとりがそれぞれのテーマを設定し論文を執筆し，発表することを到達目標とする探究学習である。なお，授業単位数は少なくとも2単位以上であることが望ましい。また，生徒一人ひとりが1200字程度の論文を執筆するとなると，教員一人当たりの生徒数は15名程度が上限であると思われる。

第一次は，問題意識の形成が学習課題となる。これまで生徒たちは，歴史や地理，公民と社会科の授業を受けてきているものの，探究したいテーマや社会に対する問題意識を持っている者は少なく，いきなり探究テーマをさせることには無理がある。そのため，授業の序盤においては，教員による講義が求められるように思われる。その際，TV番組など映像資料は生徒の関心を高めるのに効果的であった。また，「高校生ビジネスグランプリ」など高校生向けの各種コンテストは比較的取り組みやすい内容となっているので，活用することも考えられる。講義形式から徐々に生徒の調べ学習へと授業方法を移行させるにあたり，写真の多い雑誌や新聞記事を読ませることは効果的であったと思われる。この第一次の「問題意識の形成」については，1学期中間の期間をすべて使うくらいの時間をかける必要があると思われる。この第一次が弱くなると後の第二次の「論文執筆」で立ち止まってしまう生徒が増えると思われる。

第二次は，論文の執筆が学習課題となる。この論文執筆が教員にとっても生徒にとっても最も難しいものとなる。これまで生徒たちの多くは，自分でテーマを立てて小論文を書くという機会が無い。そのため，まずどのようにテーマを設定するか苦慮する者が多い。テーマを設定するためには，十分な読書量が必要であるが，これまでの読書量が十分である生徒は少ない。本を読む経験が豊富な者も，その多くは小説であり，社会科的な内容を扱った本を十分に読んでいることは稀である。そこで，まずは関心のあるテーマに関連す

中高生向けの本に目を通させる。無論、精読が望ましいが、この段階ではテーマが確定していないため、必ずしも精読を要求しない。むしろ、関連する多くの本に触れさせることを狙いとなる。その際、目を通した本のリストおよび面白かった本に対するコメントを作成させることで、教員目から生徒の関心が見えやすくなり後の指導がスムーズになる。生徒は多くの本に目を通すことで、徐々に自分の関心ははっきりしてくる。テーマの輪郭が見えてきた段階で、仮のタイトルをつけさせ、PCを利用してインターネット記事や新聞記事からも情報を集めさせる。その際、社会的な事象を丁寧に描写するだけでも社会科的探究となるため、仮説の設定は必ずしも要しない。その後、仮タイトル、プロット、問題意識、参考文献を掲載した論文概要書を作成させる。仮タイトルやプロットを書かせることで、教員は論文の構成を把握することができる。また、問題意識や参考文献を書かせることで、生徒の関心や意図を汲み取ることができる。章立ての構成については、①問題意識、②社会的問題や事象の把握（先行研究の整理）、③原因や背景分析、④解決策の提案 という一般的な展開で高校生にも不都合は生じない。ただし、安易に④に進ませると、安直な結論に終始してしまう事例がみられる。そのため、①～③に力点を置くことも探究学習を深めるための一つの手法となると思われる。生徒の作成した論文概要書を基に個別の面談を実施し、修正後に論文の執筆に進む。PC操作に不慣れな生徒も多いため、1200字程度の論文であれば、手書きで下書きを書かせた後にPCで書かせる方が効率的であるように思われる。この第二次の論文執筆には時間を要する。1学期期末の期間で論文概要書の作成および面談を実施し、夏休み中に論文の下書きを書かせるとスムーズであるが、それでも2学期はすべて論文の執筆および推敲に要することも有り得る。

第三次は、プレゼンテーションが学習課題となる。パワーポイントでスライドを作成し、一人5分程度の発表をさせた。スライドの作成については、論文執筆のように苦勞する生徒は少ない。そのため、この第三次の授業時数は比較的少なくてもあまり問題はなく、3学期の授業時数で足りるだろう。ゼミ内での発表をさせて、発表内容や方法を修正させる。その後、クラス内での全体発表をさせる。二度発表させることで、内容が精選されるように思われる。さらに、発表を受けて論文の新たな課題が明らかになることも多いため、全体発表後に論文の修正をすることも有り得るだろう。

以上が八王子高校「社会探究」を基にした探究型教科学習の一授業モデルである。先にも述べたように、生徒達は初めての論文執筆に苦勞する者が多かった。しかし、高校3年に進級し、総合型選抜や公募推薦などの大学入試を受験する生徒にとっては、本格的な論文を書いたという経験は大きな自信と実績となったようであった。

## 高2 総合コース・リベラルアーツ系「社会探究」1学期のルーブリック

	観 点	説 明	評価の基礎	5	4	3	2	1
1	グループ分けアンケート	グループ分けアンケートをきちんと記入したか。	アンケート	全ての項目をきちんと記入している。	ほとんどの項目をきちんと記入している。	概ねの項目をきちんと記入している。	一部の項目しかきちんと記入されていない。	アンケートを提出しなかった。
2	導入授業の理解	授業中に視聴したドラマの内容を理解して、適切な感想を述べたか。	感想文	正確に理解して、自分の考えを含む適切な感想を述べた。	正確に理解して、適切な内容の感想を述べた。	正確に理解しているが、感想は不適切であった。	正確に理解しておらず、感想も不適切であった。	感想を提出しなかった。
3	図書館の利用	図書館を活用して、主体的に文献調査を行ったか。	指導教員による観察	図書を検索するなど、主体的に文献調査を行った。	高校生に相応しい程度の文献調査を行った。	基礎的な文献調査を行った。	おざなりな文献調査しか行わなかった。	文献調査を行わなかった。
4	論文のテーマ	論文のテーマと、そのテーマを選定した理由に、合理的はあるか。	レポート	論文のテーマと選定理由には、高い合理性がある。	論文のテーマと選定理由には、一定の合理性がある。	論文のテーマを選定した理由は、やや合理性を欠く。	論文のテーマを選定した理由には、合理性がない。	論文のテーマを選定した理由を挙げていない。
5	論文の参考文献(図書)	論文を執筆するために、図書館における文献調査を行って文献を収集したか。	レポートに記された参考文献一覧	文献調査によって、論文執筆に必要な文献を収集した。	文献調査によって、論文執筆に必要な文献を収集した。	文献調査を行ったが、文献収集は不十分であった。	文献調査を行ったが、文献を収集できなかった。	文献調査をせず、文献を収集できなかった。
6	論文の参考文献(インターネット)	インターネット(IN)上の文献を、情報リテラシーを意識しながら調査したか。	レポートに記されたインターネット上の文献一覧	情報リテラシーを十分に意識しながら文献調査を行った。	情報リテラシーを意識しながら文献調査を行った。	調査した IN 上の文献は、やや問題のあるものであった。	調査した IN 上の文献は、活用できないものであった。	IN 上の文献調査を行わなかった。
7	指導教員からの指導	必要に応じて指導教員から受けた指導を、文献を調査したり論文の概要をまとめたりする際に活用したか。	指導教員による観察	指導を真摯に受けて、その内容を積極的に活用した。	指導を受けて、その内容を反映させようと努めた。	指導を受けたが、その内容を活かさなかった。	指導をきちんと受けず、その内容を理解しなかった。	指導を受けなかった。

【注意】

1 は論文概要書についての、2～5 は論文についての評価項目である。

論文概要書および論文を提出しなかった場合は、当該評価項目は評価の対象外(当該項目の評価点は 0 点)とする。

また、論文概要書および論文を期限後に提出した場合は、当該評価項目の評価点を 2 分の 1 に減じる。

## 高 2 総合コース・リベラルアーツ系「社会探究」 2 学期のルーブリック

	観 点	説 明	評価の基礎	5	4	3	2	1
1	論文概要書	指導教員から受けた指導や調査した文献をもとに、自己の意見を示した論文概要書を提出したか。	論文概要書	指導や文献を十分に踏まえて、自己の意見を明示した論文概要書を提出した。	指導や文献を踏まえて、自己の意見の萌芽を含む論文概要書を提出した。	指導や文献を踏まえているが、自己の意見の不明確な論文概要書を提出した。	指導や文献を参考とせず、内容の不十分な論文概要書を提出した。	指導や文献を無視して、内容をまったく欠いた論文概要書を提出した。
2	論文の構成	論文の構成は、序論・本論・結論という基本的な体裁をとっているか。	論文	序論・本論・結論は明瞭で合理的なものである。	序論・本論・結論は概ね明らかで、理解できる。	序論・本論・結論は、やや明確さを欠いている。	序論・本論・結論は不明確である。	序論・本論・結論という体裁をとっていない。
3	論文の論理性	論文の内容は、論理的であるか。	論文	論文の内容は、高い論理性をもっている。	論文の内容は、適切な論理性をもっている。	論文の内容は、必要な論理性をもっている。	論文の内容は、やや論理性を欠いている。	論文の内容は、まったく論理性を欠いている。

4	論文の参考文献	情報リテラシーを意識しながら、適切な文献を活かして論文を執筆したか。	論文に示された参考文献一覧	情報リテラシーを十分に意識しながら収集した文献をもとに論文を執筆した。	情報リテラシーを適度に意識しながら収集した文献をもとに論文を執筆した。	参考文献として、情報リテラシーの観点から問題のある文献を挙げている。	参考文献としたものは、情報リテラシーの観点から問題のあるものばかりであった。	論文中に、参考文献を明示していなかった。
5	論文における指導教員からの指導の反映	指導教員から受けた指導を反映させて、考察を含んだ論文を執筆したか。	論文指導教員による観察	指導の趣旨を理解して、多角的な考察を含んだ論文を執筆した。	指導を的確に反映させて、自己の考察を明確に含んだ論文を執筆した。	指導されたことを適切に反映させて、論文を執筆した。	指導をほとんど活かさずに、内容の十分な論文を執筆した。	指導をまったく活かさずに、独善的な論文を執筆した。
6	授業に取り組む姿勢	授業に真摯に取り組んでいたか。	指導教員による観察	指導を真摯に受けて、その内容を積極的に活用した。	指導を受けて、その内容を反映させようと努めた。	指導を受けたが、その内容を活かさなかった。	指導をきちんと受けず、その内容を理解しなかった。	指導を受けなかった。

【注意】

1は論文概要書についての、2～5は論文についての評価項目である。

論文概要書および論文を提出しなかった場合は、当該評価項目は評価の対象外(当該項目の評価点は0点)とする。

また、論文概要書および論文を期限後に提出した場合は、当該評価項目の評価点を2分の1に減じる。

### 3. 探究学習における生徒のつまずき～仮説設定による探究的思考の阻害～

2023年度に明らかにされた生徒のつまずきの一つとして、素朴な仮説を設定しようとする探究的思考が阻害されてしまったことがあげられる。探究学習に関する書籍や「公共」の教科書などでは、探究の過程で仮説の設定が求められることが多い<sup>5</sup>。しかし、無理に仮説を設定しようとして思考が矮小化してしまう事例がみられた。例えば、車いすバスケットをテーマにした生徒は、競技車椅子のタイヤは消耗が激しく高額であること、床が傷むため利用できる体育館が極めて少ないこと、着替えなどの準備に時間がかかることなど様々な角度から、車椅子バスケットの現状について調べを進めていた。しかし小論文の構成を考える段階で、探究学習のセオリーに従って仮説を立てようとする、「車椅子バスケットが広がらない原因は、金銭的理由なのではないか」と原因を一つに限定してしまい、それまで調べた事柄の多くを捨象してしまった。また、動物の義肢装具をテーマにした生徒は、尾びれを失ったイルカ「フジ」や前脚を失ったネコ「チビタ」について丁寧に調べていく過程で、動物義肢装具の困難性を体系的に理解し、明確な仮説の設定をすることな

<sup>5</sup> 「公共」の教科書では、巻末に探究学習に関する特集ページを設けているところが多い。中でも東京書籍『公共』には探究学習のプロセスが以下の①～⑩のように詳細に示されている。仮説の設定は、④が相当し、「探究のゴール地点をイメージするために、探究課題（リサーチ・クエスチョン）に対して、現時点での仮の主張（仮説や意見）をつくっておこう」（傍点は引用者）という記載もあり、探究のゴール地点を自身の主張に求める姿勢がうかがえる。

① 関心のある探究テーマをあげる ② 探究テーマについて下調べし、探究課題を考える ③ 探究課題（リサーチ・クエスチョン）を決める ④ 自分の主張を仮に考える ⑤ 探究方法を決め、計画を立てる ⑥ 探究に必要な情報（データやさまざまな主張など）を収集する ⑦ 情報を読み取り、整理する（論争状況の整理など） ⑧ 自分の主張を決める ⑨ アウトライン（論証・説明の流れ）を考える ⑩ 説明・論述する ⑪ 全体の学習をふり返り、成果と課題を確認する

く、探究学習を進めることができた。

これらの事例から、探究学習において仮説設定が必ずしも必要ではないこと、さらには仮説設定による負の側面が浮かび上がる。では、なぜ仮説を設定することが探究的な思考を阻害するのか。そもそも、仮説設定の論理と社会科の探究思考の論理が異なることが考えられる。これについては森分も「発見学習も探究学習も学習過程は、基本的には仮説・検証のかたちをとっている。…（中略）…発見学習，探究学習は，本来自然科学的教育において考案されたものであり，それらは，自然科学における認識の論理にその理論的基礎をおいている。…（中略）…事象の全体をより詳しくという認識の論理は，自然科学とは質的に異なる人文・社会科学におけるそれである。」（森分 2010）と指摘する。つまり，探究学習における仮説設定の論理は自然科学を基礎とするものであり，人文・社会科学の探究論理とは異なるということだろう。おそらく，仮説を設定するタイプの探究学習は，次なる実験や観察の条件を演繹的に導く活動や，実験結果や観察結果から一般理論を帰納法的に発見する活動を想定しているのではないだろうか。人文・社会科学においても，そのような論理展開が無いわけではないが，主ではないだろう。先の森分の指摘にも含まれるように，人文・社会科学においては，事象のより詳しい把握が探究活動そのものになる。そのため，既にさまざまな資料から十分な情報を得ている場合，仮説の設定は，（強引な）帰納法となってしまう。その際に，無理に一般的な理論を抽出しようと，使える情報のみに着目してしまい，せっかく集めた情報の多くを使えない情報としてしまう。つまり，仮説を設定することは余分な情報を捨象することにもなるため，探究自体が小さくなってしまう<sup>6</sup>。

以上のように，社会科の探究学習における仮説の設定は，多くの情報を余分として捨象し探究思考を矮小化してしまう可能性がある。社会科の探究学習は，一般的な理論を発見しようとするものに限られない。そのため，そもそも自然科学的な仮説設定とは齟齬が生じやすいものであると思われる<sup>7</sup>。

なお，仮説設定による探究思考の阻害について，日本社会科教育学会 第 74 回全国研究大会(沖縄大会)にて口頭発表の機会を得た。先の森分による指摘と同様に，司会者である東洋大学の栗原久教授からも，探究学習を探究プロセスによって分類する必要性が指摘された。また，他の参加者からは生徒のつまずきを解消するための具体的な授業方法を提案いただいた。これらの指摘や提案については，次年度以降の実践に活かしたい。

---

<sup>6</sup> 同様のことがトゥールミン・モデル等の論理モデルを使用した探究学習についてもいえるだろう。トゥールミン・モデルをはじめとした多くの論理モデルは，主張（結論）に至るプロセスを図式化したものである、そのため，論理モデルに探究活動を当てはめようとすると，主張（結論）に至るための情報しか当てはめることができず，多くの情報は論理モデルに当てはまらずに捨象されてしまう。

<sup>7</sup> また蛇足になるが，仮説を設定しようと言語化することによる思考の矮小化も無視できないと思われる。



## おわりに

本研究の成果としては以下があげられる。まずは、探究学習に関する先行研究を整理したことである。特に 2024 年度では問題解決学習を振り返ることで、昨今の探究学習が社会的な問題の解決に挑みながらも、児童生徒にとっての切実性が乏しくなっていること、問題の解決に重きが置かれるあまりに原因の追究や考察が弱くなっているという課題が明らかになった。本研究である八王子高校「社会探究」では、児童生徒の切実性と社会的な問題の結節に挑んだことは成果といえる。また、ルーブリックを含めた詳細な授業記録を残し、授業を検証することで探究学習の孕む内在的な難しさ（生徒のつまずき）を浮き彫りにしたことも大きな成果である。特に、探究学習ではセオリーとされる仮説設定が、思考を矮小化するという負の側面を示した意義は大きいだろう。なお 2024 年度については、教員一人当たり約 30 名の生徒を 1 単位で指導するという外在的制約の大きい状況で実践されたことにより、探究学習における適正人数と適正時数が明らかにされた。

一方で、2023 年度に明らかにされた探究学習に内在する諸種の難しさ（生徒のつまずき）に対する有効な指導法の開発、1 単位や大人数での探究学習における有効な指導法の開発には至っておらず、これらは課題として残されたように思う。

なお、本研究は 2023 年度（令和 5 年度）より継続されている。そのため、本報告書は令和 5 年度 研究報告書「高等学校社会科における探究型教科学習の授業モデル構築」を基礎とし発展させたものである。

## <参考文献>

- ・大津和子『一本のバナナから』国土社 1987
- ・唐木清志 編著『社会科の「問題解決的な学習」とは何か』東洋館出版社 2023
- ・杉浦真理 他『未来の市民を育む「公共」の授業』大月書店 2020
- ・谷川彰英『問題解決学習の理論と方法』明治図書 1993
- ・森分孝治『社会科授業構成の理論と方法』明治図書 2010
- ・大阪府立西成高等学校『反貧困学習—格差の連鎖を断つために』解放出版社 2009
- ・京都市立堀川高校「京都・堀川高校流『探究』の時間（1）高1前期 主体性を引き出す授業」2021年10月（TEAChannel）
- ・京都市立堀川高校「京都・堀川高校流『探究』の時間（2）高2前期 探究活動の評価規準」2021年11月（TEAChannel）
- ・社会科の初志をつらぬく会編『追究する子どもが学ぶもの』黎明書房 1990
- ・全国民主主義教育研究会『今日からできる 考える「公共」70時間』清水書院 2022
- ・（特活）開発教育協会内 ESD 開発教育カリキュラム研究会『開発教育で実践する ESD カリキュラム』学文社 2010

・ステイヴントゥールミン著（戸田山和久訳）『議論の技法』東京図書 2011

<共同研究者>

（代表）渡邊 大介

金井 太一，長谷川 陽介，波平 慎太郎